



トンガレポート <16>

2018/7/25

青年海外協力隊 シニアボランティア
2016年度 2次隊 卓球隊員 西岡 昌彦

今回は 2018/6/29(金)~30(土) の 2日に渡りトンガで初めて開催された卓球の国際大会、ITTF Oceania Tour について、トンガならではの出来事も含めてお伝えします。

(ITTF = International Table Tennis Federation : 国際卓球連盟)

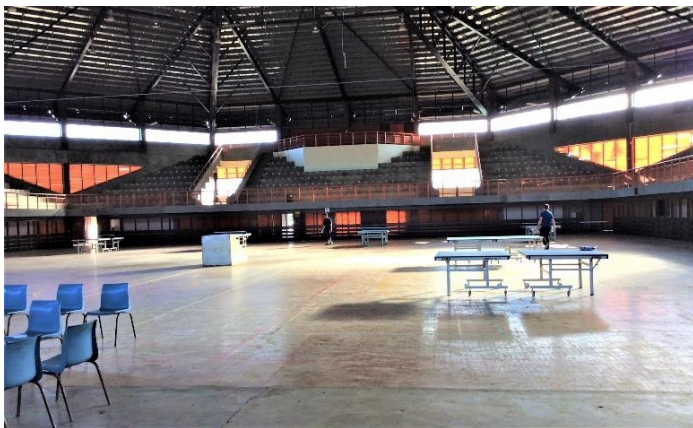
1、大会について

オセアニア ツアーという大会名で年に6回、毎回オセアニア内の異なる国で開催。この地域の各国から選手が参加し、ツアー成績によりさらに上のオセアニアカップに出場権を得るといふものです。今回トンガはこのツアーの第1戦として開催されました。

これまでトンガで公式な卓球大会は全国大会が2回開催されただけで、3回目にして突如国際大会が開催されることになりました。



会場となった アテレ 屋内スタジアム



設営中の試合会場、床はコンクリート

2、各国参加選手人数と競技種目

男子はオーストラリア(3)、ニュージーランド(1)、フィジー(2)、ソロモン(1)、トンガ(14) の 21名。

女子はフィジー(2)、トンガ(6) の 8名。

5か国、合計29名の選手により男女シングルス、男女ダブルス、ミックスダブルスの5種目が行われました。

3、審判講習会

今大会の主管はオセアニア卓球協会でしたので6/25(月)にオーストラリアから3人の運営担当者がトンガに到着しました。



審判講習会、休憩中の様子

これまでトンガには卓球審判員の有資格者は一人もいませんでしたので、大会当日の審判員養成を目的に前述3人のうち国際審判員の方が講師として大会前の2日間、資格取得のため講習会が実施されました。

私もトンガ卓球協会から受講するよう依頼されました。事前に手渡された受講者名簿には26名の氏名がありましたので割と大きな講習会を予想していました。

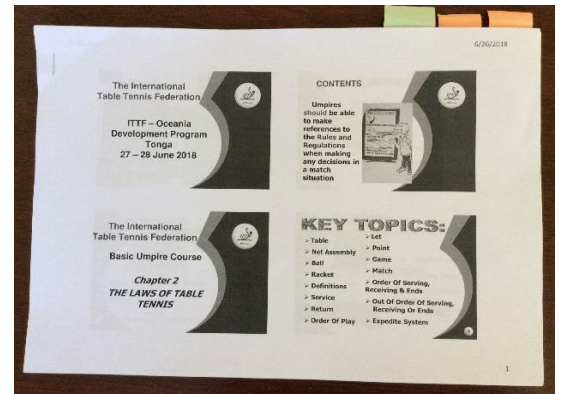
しかし講習会当日、開始時刻の9:30前に来ていたのは私以外に4~5名でした。せっかくの機会でしたので私は最前列の席で講義を受けました。トンガで遅刻は珍しいことではありません、時々振り返ると少しずつ受講者が増えていました。

昼食時には10名強の受講者が確認できました。この国では一日がかりの講習会や催しの際は昼食が提供されるのが一般的です。そうしないと出席率が低くなると聞いていました。そして今回、昼食を終え午後の講義が始まったときの受講者は朝と同じ人数でしたので驚きました。

半数は昼食を目当てに来たようで、このあたりがトンガ的だと感じました。日本ではあり得ない出来事でしたので何だか講師に対して失礼で申し訳ない気持ちになりました。

講義は英語で行われましたがルールは世界共通ですし、テキストも配布されていたので何について解説をされているかは理解できました。そして動画による試合中やルールに関する様々な事例の紹介があり、知識の向上に大変役立ちました。

初日の終盤、審判員資格取得のため翌日は試験があると告げられました。ルールは世界共通でも英語で試験となると話は別です。トンガではテレビもラジオもない生活、日没後は早めに寝るのが常ですが、この日は配布されたテキストを翻訳ソフトにかけて深夜まで試験対策を行いました。トンガに来てから一番英語を勉強したと思



講習会で使用したテキスト



ます。

翌日、講義の後にいよいよ試験。最終的に受験者は私を含め6名、制限時間は1時間。これは私にとってルールを知っているか否かよりも、英文の質問内容を正しく理解できるかというところにかかっていました。トンガ語と英語が公用語なので英語に苦勞せず、トンガ人たちが30分過ぎに次々と退室する中、私は制限時間いっぱいまで答案を提出しました。最後に答案を提出したため直後に採点が始まりました。終了後、講師が老眼鏡をかけたまま下に

試合会場で 審判講習の講師とともに

サインを出してくれました。前日深夜まで頑張った甲斐もあり、この瞬間は私にとって忘れられないシーンとなりました。受講予定者は26名でしたが最終的に受験した6名全員が合格できました。

4、私の役割と大会時の様子

大会前、私はトンガ人選手のベンチコーチに入り、彼らの試合がなくなったら海外から参加選手の試合観戦をさせていただこうと気楽に考えていました。

ところが大会開始直後に審判員講習会の講師(大会中は審判長と進行を担当)から次々と審判指名を受けました。

トンガには大会直前に審判員講習を受けて試験をパスした6名しか資格保持者がおらず、全員自動的に大会運営側の一員になっていました。

大会初日、試合に使用された卓球台は4台、私以外の審判資格保持者は全員選手兼務でしたので特に試合開始直後は私に指名が回ってきました。以降、大会終了まで私は審判員に徹しました。



少々さみしい開会式の様子、でもテレビカメラが入ってます



ところで、試合を行うにあたりスコアボードが必要ですが、この国に卓球専用のものは私が日本から持ち込んだ左画像、小型の1台しかありません。誰もスコアボードに関して考えていなかったようです。私も運営担当者が備品として持参されると思っていましたが仲間のボランティアがバレーボール用のスコアボードを3台持っているのを知っていたので万一のため前もって借りておきました。

📷 第一回全国大会で初めて使用されたトンガに1台しかない卓球用スコアボード

大会前の打ち合わせ時、オセアニア卓球協会担当者はスコアボードはトンガにあると思っていたようで「ない」とわかったとき困った表情をされました。私が「卓球用でなくてもよければ準備できます」と提案したところ、「あれば何でもいいから準備して欲しい」とおっしゃり胸をなでおろしていました。結果として準備をしておいて大正解でした。

卓球用ではないので加点の際にシートがめくりにくく、1セット終了ごとに0-0に戻すのに時間がかかりましたが数字が大きく見やすかったので、大会中は大活躍しました。

大会二日目、試合用に卓球台を2台使用し、シングルスは準々決勝から、ダブルスは準決勝から開始されました。ところがここでまた日本ではあり得ない



今大会中、大活躍したスコアボード



出来事が起きました。何と、6名しかいない審判員のうち2名が無断欠席。その影響で残りの4人はフル稼働で審判を務めました。

初日は予選リーグの試合担当が多さほど緊張しませんでした。二日目は準々決勝以上の担当でしたのでミスをしたようかなり神経を使いました。

日本の卓球大会で審判を務めた経験は

男子シングルス準決勝 NZ選手対 AUS選手の試合で主審を務める 🇯🇵 ありますが試合はジャンケンから開始。ところが今回は本格的にコイントスから開始、最初はうまくできず練習の必要性を感じました。イエロー・レッドカードも準備され、初めて手にしました。審判を続けるうちに大会規模の大小ではなく、日本にいては絶対に経験できない舞台にいることに気付き、緊張しながらも貴重な経験をしていることを幸せに思いました。

今思えば審判講習受講時から講師とは互いに信頼関係ができていたようです。大会中は彼から次々と主審の依頼をされました。私も彼の期待に応えるよう判定のアピールを迅速に行い、大きな声でカウントするよう心がけました。

しかし何となくこのままでは全ての決勝戦の主審を任せられるような気配になってきたので審判長(講師)に、必要ならば私は喜んで協力しますがトンガ人もこの機会に多くの経験をすべきだと思います、と提言。

すぐに言葉の意味を理解していただいたようで、私は男子シングルス準決勝と女子ダブルス決勝の主審、女子シングルス決勝の副審を務めて全ての役割を終えました。最後の試合、男子シングルス決勝戦の審判はトンガ人が務めました。



男子シングルス決勝、NZ選手対 AUS選手



各種目の入賞選手たち

5、おわりに

英語による資格試験や準決勝の主審など多少の苦労や緊張もありましたが、この大会を通じて初めて経験したことが多く、あらためて卓球を続けてきて良かったと思いました。

フィジー、ソロモンの選手との再会、帰りに私のもともと来て Thank you と言ってくれた NZ の選手。どれもよい思い出です。

何よりも大会関係者、選手の協力が無事に大会を終えることができ心より感謝しています。